

## 令和7年度 第5回小平市社会教育委員の会議要録

と き：令和7年12月18日（木）午前9時30分～午前11時00分

ところ：市役所5階 504会議室

### 1 出席者

小平市社会教育委員 9人（1人欠席）  
傍聴者 1人

### 2 内容

#### <議題>

資料に基づき、事務局から説明を行った。

- (1) 第56回関東甲信越静社会教育研究大会 神奈川大会について（報告）
- (2) 令和7年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会交流大会・社会教育委員研修会について（報告）

#### <事務局報告>

各課・各館より、実施事業等について報告した。

##### 【地域学習支援課】

- (1) 令和7年度青少年健全育成講演会について（報告）
- (2) 令和8年二十歳の集いについて
- (3) 第22回小平よさこいスクールダンスフェスティバル in 2026
- (4) 第19回多摩六都ヤング・ダンスフェスティバルについて

##### 【公民館】

- (1) 公民館主催イベント（10月、11月）について（報告）
- (2) 公民館主催イベント（1月）について

##### 【図書館】

- (1) 図書館主催イベント（11月、12月）について（報告）
- (2) 図書館主催イベント（12月～2月）について

#### <その他>

公共施設マネジメントの取組の当面の進め方

### 3 議題及び事務局報告、その他についての意見・質疑応答

○第56回関東甲信越静社会教育研究大会 神奈川大会第3分科会のレポートの欠席委員からの報告（事務局代読）

まず、2日間を通して全ての人が学び続けられる社会をつくるために、社会教育ができることについて様々な視点から話を聞き、考えを深めることができました。記念講演、シンポジウム、分科会、全てに共通していたのは、講演者の方々が誰かをデコライズするのではなく、一緒に物事に取り組んでいくという社会教育への姿勢を大切にしていたことです。

東京2020オリンピック開閉会式ステージアドバイザーを務められた栗栖良依さんからは、障害のない人がある人に合わせるといふより、ある人がない人に適用していくのも大事、一方で障害のある人とない人がともに活動していく中で、活動後の感想では、ない人から自分らしくいられる場所に出会えた、という声を多くもらうというお話をいただきました。

第3分科会では、「子育て・家庭教育の大切さを認識し、地域・学校など社会全体で支えるような親や子どもを支援していく取組について考える。」をテーマに、群馬県高崎市と神奈川県寒川町の取組事例を発表していただきました。特に印象的だったものは、高崎市のちゃぶだいトークという活動で、子育て中の親子がワンテーブルに集まり、悩み事やアドバイス等話し合うことができる取組で、分科会の会場でも話題になっていました。

同じように、小平市の活動にも様々な企画や取組の中に、多様な世代の所属、特性のある人が一緒に行うものが多いことに改めて気づきました。一方で、〇〇の人とか、限定された自分事として捉えられるからこそ、参加してみたいくなる層の人もいるのかもしれないと思いました。

参加するきっかけは様々であってよいと思いますが、最終的に今回の研究大会のような、一緒に地域を盛り上げていけるような人づくり、地域づくりができると、今回の大会テーマのような、全ての人が学び続けられるような社会が形成されていくのではないかと考えました。

○委員 第4分科会に参加した。テーマが共生社会の実現であった。事例が二つあり、一つは川崎市での外国人住民との共生がテーマであり、もう一つは茅ヶ崎市での、障がい者の公民館活動がテーマであった。川崎市のテーマは、長年川崎市に居住している外国籍の住民の方が多数おり、日本語をボランティアで教えたり、さまざまな取組をしたりしている事例の紹介であった。ヘイトスピーチを解消するにはどうしたらよいかとの観点からも努力されている。地域性もあると思うが、きめ細かにさまざまなことにトライされている印象を受けた。

一方、茅ヶ崎市は、自閉症児の親の会の講座を公民館で開いた際、その講座に参加した視覚障がいの方から、障がい者が活動するときの課題について多くの意見をいただき、その課題を一つ一つ解消していく取組についての紹介であった。共生社会というテーマで、とても興味深く学ばせていただいた。

○委員 大会に参加した感想について。まず、参加された社会教育委員の皆さんの平均年齢が高いと感じた。他地区と比較して小平市は委員の年齢が若いと感じた。他地区の委員の方から、いろいろ話を伺い、それぞれの社会教育委員の持つ、その人なりのワンマンパワーが大きいのではないかと印象を受けた。小平市の活動も、代々受け継がれてきたものが、若い人たちに引き

継がれ、育成・発展していることが、自主研修してとてもよく分かった。今回の大会では、他地区の活動を知ることで、小平市がこれからさらに発展していく未来が見えた。

○委員 この大会で感じたことは、全体会、分科会、いずれにおいても、つながること、つながりをつくる人であることが大事であることが、どの話でも感じられた。複雑な社会になると、自分だけ、自分の所属する組織、団体だけでは解決できないことがたくさん増える。そのため、他の誰かと、または他の組織や団体とつながることで解決する道は開けてくる。そのような糸口が見つかる話をいただいた。

つながりに関しては、11月29日に小平つながりフェスが合った。今後、さまざまな人とつながっていくことが大事なんだと改めて認識した。

○委員 東京都市町村社会教育連絡協議会交流大会・研修大会の感想を述べる。私自身の心に残るキーワードが幾つかあった。それは、ゆるやかなつながりでいい、出来高を求めなくていいとの言葉であった。私自身、出来高を求める、結果を求める傾向があるので、それにこだわらなくてよいとのことで、少し安心した。その後のパネラーの方々からの報告でも、まずは自分が楽しむこと、関わりたいと周りを思わせる仕組みを考えることなど、さまざまな提案があった。それらをこれから生かしたいと思う。

こどもをお客さんと考えて、一方的にサービスを提供することだけでこどもは成長するでしょうかとの話があった。そのことも少し頭の隅に置き、ケース・バイ・ケースではあるが、一方的にサービスを受け取る以外のパターンも考えていかなければならないと思った。

○委員 交流大会・研修大会の感想を述べる。東京都市町村社会教育連絡協議会の笹井会長の基調講演からスタートして、パネリストの皆さんの発表で展開していく中で、パネリストの3人のどなたも「やりたい」との思いからスタートしたとのことであった。スター時点では、まずできることからやり始める。足りないところがあってもやりはじめるとのことであった。参加者が何か気になって関わられる隙間や余白があり、その部分から始まったことから、参加者から当事者への循環ができ上がり、今まで続いてきているとのことであった。

先ほど別の委員からお話があったように、こどもたちをお客さんとして扱い、全てを準備して迎えるのではなく、やれることからまず始めること。そして、こどもに対しても真剣に向き合うこと。例えばスポーツチャンバラであれば、こどもに負けないように大人が取り組むこと。その中でこどもが少しでも大人に勝てると、本当にこどもは喜ぶとの話があった。けがをしたら駄目ではなく、やれることをまずやって、その活動が20年程度にわたる長い期間での活動になっているとの話であった。何かできないことを探し事業を行わないのではなく、できることを探して事業を進めることに関して、大変貴重なお話を伺うことができた。

○委員 交流大会・研修会に参加した感想である。第4ブロックの西東京市の下野谷遺跡を基にして、市民の人たちとつながっていった事例を教えていただいた。ある市民が下野谷遺跡に夢中になったことがきっかけで、キャラクターが生まれたとのことだった。小平市もすてきな遺跡があるので、それがきっかけとなっていくことができたらと感じた。

○委員 地学的に言うと、小平市も西東京市も崖線ができて水が湧くところである。小平市も

鈴木遺跡を核として盛り上がればよいと思う。

○委員 交流大会・研修会に参加した感想について。研修会のパネリストの3人について、一人は、学校で活動されているおやじの会の方であった。後の二人はNPO法人の方であった。小平市はこれまで、学校で実践されている学校支援ボランティアや、放課後こども教室で、全国的にトップを走っていた市であった。そのため、学校で活動することに力が入っていると思う。しかし、社会教育は、学校外で活動している団体に関わり、大人が学ぶことも大切であると考え。小平市の社会教育の場面でも、学校以外での社会教育に関してもう少し広がりが出てほしいかと思う。

○委員 交流大会・研修会の資料に登壇者の紹介が出ている。笹井会長は社会教育の専門の方である。パネリストは、一人はプレイパークをつくりたいと活動してきた方、一人は小学校のおやじの会の方で、技術系の会社に勤めている人であった。おやじの会の方は、自分の子どもが遊べる環境をつくるために一生懸命活動していく中で、こどもが卒業した後も活動を続けてきた。その後、社会教育士の資格を取得している熱心な方であった。一人は、アートフル・アクション/フォトグラファーの方であった。この方は、自分からやりたいと始めた訳ではなく、いつの間にか巻き込まれてやってきた。そのような関わり方もあってよいとの話であった。本当に緩いつながりから、アートなどへの方面に生かした話であった。パネリスト3人ともそれぞれの特徴があり、さまざまな人をうまくピックアップして紹介していると思った。

○委員 資料No.3の令和7年度青少年健全育成講演会に参加したので、その報告をする。

講師は千葉大学教育学部の三森先生であった、講師は看護師から、その後、養護教諭になり、現在は教育学部の先生と自己紹介されていた。

講演内容は、こどものウェルビーイングを支えることは、その地域のつながり、連携がとても大事であるとの話であった。例えば教育の部門と医療の部分と福祉部門とがつながっていくことが大事であり、そのつながりの中で、地域で子どもを育てる、社会で子どもを育てるという環境を築いていくことがとても大事だとの話であった。

最後に、こどものウェルビーイングを保障するまちづくりに必要なものは、やはりつながりであり、安心できる人間関係がまず必要であろうとの話であった。三つの話があった中で一つ目が安心できる人間関係が必要であること。次に、こどもが体験する機会が必要であること。最後に、居場所となる活動拠点が必要であること。この三つがあって、こどもたちの育ちが保障されていくのだろうとの話であった。

とても丁寧な口調での話であったが、内容はすごく多く、なかなかその場で消化することは難しかった。話したいことがたくさん詰まった方との印象であり、また、実践を積み重ねてきた方であった。とても勉強になる会であった。

○委員 資料のNo.10の図書館の開催一覧の「休館日の図書館へようこそ」の説明を聞き、よいイベントだと思った。親子を対象としたイベントであるので、お子さんの年齢のイメージやどのようなイベントであるのか伺いたい。また、小さいお子さんと図書館に行くと、なかなかゆっくりできないことから、お子さんを見ていただけるスタッフが配置されているのかが気になる

質問した。

○事務局 対象は、未就学児のいる親子6人家族程度である。1家族4人まで、こどもは2人まで。0歳児の家族は2組までで予定している。また、託児サービスを実施する予定である。時間は午前10時から正午までの2時間程度を予定している。職員にお声掛けいただければ、職員が対応する。また、大人については希望によりおはなし会と館内案内、その他は自由時間で過ごしていただくこと、お子様については読み聞かせや手遊び等の実施を予定している。

○委員 資料No.5と6小平よさこいスクールダンスフェスティバルと多摩六都ヤング・ダンスフェスティバルについて質問がある。よさこいの活動に関わらせていただいている。参加人数が多く、保護者の客席の入替えが多いイベントであることから、2部制で前半と後半に分けて入替えをしている。

事務局の説明ではヤング・ダンスフェスティバルの来場者が1,000人で、小平よさこいスクールダンスフェスティバルの来場者数が800人とのことであった。ヤング・ダンスフェスティバルは、電子チケットでの申込みとしているとの話であったが、リスクとしては、キャンセルした後に、空席になった座席が、そのままになることが想定されると思う。その点について解消のための工夫などあれば伺いたい。

○委員 私は科学の祭典を実施している。例えば4,000人来ることを想定して進めていたが、実際に来場したのは千何百人とのことがよくあった。電子チケットの導入は、会場のキャパシティがあるのに入れないとの残念な結果になることがある。

○事務局 電子チケットの導入を進めているが、今、委員からいただいた課題と向き合いながら、今後どのような形でこれを進めていくかについて引き続き検討を続けていく。

○委員 本日配布された冊子、ひまわりについて感想である。「社会を明るくする運動」作文集で、掲載されている中学生の文章が「明るい社会」との抽象的なテーマに対し、こどもたちが具体的な意見を述べられていることに感心した。

この若者たちが犯罪、非行、更生、思いやりの観点に対して、このような発言をすること自体が教育的な効果があるのではないかと思う。

また、冒頭の青木教育長の言葉が掲載されており、こどもたちの感性との言葉について書かれている。こどもたちの感性が、明るい社会、自分も人も大切にできる世の中の礎になるのではないかと書かれている。感性とは美しいものを美しいと感じる、他者を思いやるなど、そのようなところを育むことであり、そこから共感や想像力が生まれ、個人の成長と、それ以上に社会の基盤をつくっていくことになる。その感性を伸ばしていけたらと読んで感じた。

○委員 まずは、ひまわりについての感想をいただいたが、この冊子の編集に関わっていることから、自分が褒めていただいたような気がした。

この作文集は、私立の中学校に通う生徒も含めた、市内の中学生56人の若々しい感性でいろんな意見や感想が書かれた文集である。読むことで、教えてもらえるようなことが、たくさん書いてある。ぜひ読んでいただきたいと思う。

次に、資料No.9と資料No.10に関して質問したい。

資料No.9 ③のブックスタート講演会であるが、参加者45名との報告であり、多くの方が参加しているイベントであると思った。この講演会の対象者は、乳児がいる保護者に限定されたものなのか、一般の方も含めて対象としているのかお聞きしたい。もう一つは、資料No.10 ③の「図書館で“ぼうさい”について学ぼう!」についての質問である。講師はどのような方であるのか。

**○事務局** ブックスタート講演会は、どなたでも参加が可能である。また、防災の学びの講師であるが、東京海上日動火災保険株式会社に所属されているユニットリーダーの方である。経緯としては、東京海上日動火災保険株式会社が地域社会貢献活動の一環で実施している出張事業があり、会社からお声掛けがあった。図書館には防災に関する資料や本がかなりあるので、それらを見て、防災を学びましょうとの内容である。

**○委員** このような講演については、講師がどのような方であるか書き添えてあると、情報としてはありがたいかと思う。

**○委員** 要望について、よさこいスクールダンスフェスティバルと多摩六都ヤング・ダンスフェスティバルについて思ったことも絡めてお話ししたい。

このよさこいが始まったとき、電話で当時の市の担当課長の方が、このフェスティバルをやりたいと熱心に訴えていた。当時関わっていた副校長先生も熱心な方で、それらの人の熱意でこのフェスティバルが始まり、今回22回目を迎えている。

次に、ヤング・ダンスフェスティバルであるが、よさこいと同じ市の担当課長が関わっている事業である。

このダンスフェスティバルが始まったきっかけについて、その課長が、小平高校を何かの用で訪問した際、廊下の端っこの隅っこのほうで遠慮がちにダンスをしている女子高生がいて、声を掛け、話を聞き、それを圏域の広域行政圏域の活動につなげ、事業として提案をしたとのことであった。

また、その担当課長の方が、この圏域の全高校を回って、どうですか、こういうのがあったら参加しますかという、そういう聞き取り調査をした。これが事業として成り立つと思い、事業が立ち上がったとのことであった。また当時の教育長も、さまざまな補助金の事業を持ってくる方で、本当に大変であったが、楽しかった、面白かったと話をしていた。このヤング・ダンスフェスティバルも19回目になる。いま続いている事業を続けていくことも重要であるが、新しいイベント、取組についても始めていただくことができれば、とてもうれしいと思う。

ずっと今までのものを守り続けるだけではなく、そういったエネルギーも感じられるような社会教育になるといいな、行政になるといいなと思う。

**○委員** 今回の報告事項にはないが電子図書館について伺いたい。自分なりに試しているが、実際に図書館に足運んだほうが早いなどの印象を受けた。

仕事して忙しい方には便利なものであると思う。また、字を拡大することもできるので年配の方にもメリットがあると思う。また、オーディオブックなども揃えている。そのため、広くこのサービスを活用していただくためには、市報などで使い方について説明を載せる、または図書館

の中の掲示で楽しみ方を示すなど、サービスに対しての啓発、啓蒙をやっていただけるとありがたいと思う。

○事務局 周知について。10月20日号の市報で、11月18日からスタートしたことを掲載している。また、11月20日号の市報では第一面で、電子図書館がスタートしたことを掲載している。使い方についてはホームページをご覧くださいとしており、ホームページではマニュアルなどを充実させることに努めている。また、図書館の掲示物についてはホームページの掲載と同じ内容で、各地区館、中央図書館について掲示物を貼り出している。使用に関してのマニュアルについては、URLなどに関してのマニュアル類は分厚くなってしまいうこともあり、ホームページをご覧くださいとして周知に努めているところである。

今後はまだこのサービスを知らない市民に対して、引き続き様々な媒体を通じて周知に努めていくことを考えている。

○委員 サービスの周知については理解したが、使い方についての説明などの提供がほしい。例えば今、各図書館で工夫して、こんな本もあるんですよと展示している。実際に来館した市民はその展示を見て、手に取って帰っていかれる方がいる。また、各図書館で工夫してテーマに沿って本を並べてみるなどしており、いいなと思っている。電子図書館についても、気持ちが軽くできるようにハードルを下げるような使い方などを示す取り組みがあるといいなと思う。

○事務局 電子図書館での展示の仕方については、最新動向等を注視しながら研究を続けてまいりたいと思う。

○事務局 電子図書館が導入され周知をしているが、使いづらさについての意見もかなりいただいている。それらの意見を集約し、図書館としてどのような方向で市民の皆さんに「このような使い方ができる」など示していくことができたかと考えている。電子図書館は、学校の学習などにも使えると思う。それらのことも視野に入れて、今後研究を進め、どのような形で皆さんにお伝えしていったらいいか検討していきたいと考えている。

○委員 ヒントになるか分からないが、私が勤務する大学の図書館では、電子教科書をかなり活用している。そうすることにより、それを使ってみようと思ったり、場合によってはその出版社の人が来て使い方を教えるなどの機会も増える。要するにインターフェースとしての新しいものをどうやったら使えるのだろうかと考えていくことが必要なのかもしれないなと思って聞いた。

また、No.4二十歳の集いについて伺いたい。平成22年から実行委員会形式で行っており、とてもいい取組だと思う。小平第四中学校の60周年行事に携わっていたので、中学生の時期が大事であること、小平市はその時期をうまく捉えていると思う。

一方、実行委員会で行うことでの苦勞もあるかと思うので何か工夫していることなどあれば、教えていただきたい。

○事務局 実行委員の集め方は市報等で募集である。募集だけでは集まらないことから、例えば、地域の教育に関わる方のお子様や、青少年リーダー養成講座を修了した青少年リーダーなどにも声を掛け、委員を集めている。委員として応募した人のつながりから、当時の中学校のつながりで、友人などにも声掛けをして参加していただいている。市報等の募集を見て、参加した人も含

め意見を出し合って、内容を検討している。

○事務局 課題について補足したい。課題としては、やはり若い年代はなかなか集まる機会がない。時間的な問題で、当日ぎりぎりまで内容が確定できないこともある。毎年最終的にしっかりできるのか課題になっている。企画や内容についてある程度実行委員に任せ、事務局が補助する形で行っているが、事務局が入らないところではスケジュール感の把握が難しいことから、事務局で少し工夫をして、手を入れていく必要があるかと考えている。

○委員 公共施設マネジメントの取組の当面の進め方の説明の中で、パーク・サイトの別棟整備を中止するとあった。パーク・サイトはこれからも交流とにぎわいのエリアとなるとのことであるが、カフェや多目的室が今後建設される見通しはあるのか。

○事務局 今回の見直しについては、今後新たに施設を整備することは選択肢としていない状況である。

一方で、これまで説明してきたことに期待していただいている方が多くいることは承知しており、別棟建設を中止した後の代替策についてはこれから検討していくことになるが、これまで寄せられたご意見などにおいても、例えば、キッチンカーなどが来るとよいとのご意見が寄せられたことなどもあり、今後、そのような事業者へのヒアリングであるとか、他の自治体の事例なども参考にして、検討していくことを考えている。

○委員 当面の対応策の一番下に、延期に伴い小平第十三小学校については必要となる維持改修を行うとある。複合化される施設に関しても同様に安全上、必要な維持改修が行われるかについて確認したい。その他、小平第十一小学校の計画が最初にスタートしたときのことであるが、こどもたちの意見を多く聞いていたことが記憶に残っている。それから大分時間が経ち、それらの意見を述べたこどもたちは卒業されているような年代になることを考えたとき、工事を延期したときに、その希望を出したこどもたちの意見が必ずしも反映できない可能性が高いのかなと感じている。その際に新しくできた校舎に入るこどもたちは自分たちが思ったこと、考えたことが反映したものではない校舎に入ることになる。手続としては意見を聞いて建物が建っていくことに関しては正しい手続だとは思いますが、期間が空き過ぎることで、誰の意見が反映した建物なのかが、宙に浮いてしまうような印象を受ける。こどもたちの意見の反映のさせ方について、今後このような意見もあったことを気に留めていただき、よりよい形で進んでいただければと思う。

まずは、こどもたち、また、社会教育施設を使う方たちにとって、その施設が安全であることが一番大切かと思う。財政状況がよくない中で事業を進めることは難しいが、先ほどの意見とともに、安全の確保だけは十分に配慮していただければと思う。

○事務局 1点目の小平第十三小学校に複合化される施設、具体的には二つの地域センターということになるが、これらの目標耐用年数自体はまだ残存期間があるが、委員の指摘のとおり、設備を中心に何らかの改修は必要になってくると考えられる。施設を存続する間については、市民の皆様が安心してご利用いただけるように、必要な維持改修は行っていくことを考えている。

2点目の、これまでお聞きしてきた児童、こどもたちの声について、一定の期間が空くことに

なるが、これまでお聞きしてきた思いはまず大切にしていきたいと考えている。一定期間が空くとはいえ、普遍的な内容、将来においても活用できる内容もあろうかと思う。そのような内容はできるだけ反映し、再開する頃には、そのときの児童の声も聞くことになるのではないかと考えている。それらを考え合わせて、よりよい設計をしていければと考えている。学校とは引き続き協力連携しながら進めていきたいと考えている。

○委員 先ほど別の委員からも意見があったが、パーク・サイト、カルチャー・サイトの既存施設を解体して、パーク・サイトは交流とにぎわいのエリアとなるよう検討することだが、お金をかけなくてもできるようなことを何とか模索していただければありがたいと思う。社会教育委員の会議でも、毎年話し合いの中で、そのような場所があるといいとの意見が頻繁に出てくる。例えばベンチと何か日よけがあるだけでもいい。建築基準法の問題なども考えられ、屋根の設置はいろいろ難しいのかもしれないが、知恵を出していただき、一人でも滞在できる、市民が安心してそこに集える場所ができたらいいなと思っている。